事のみ知れるにや、又隱岐國の北の海中にある竹島には猫のみ多く有て、世間の猫よりは格別に強くして、鼠を取る事もよしといへり、かゝる猫のみ住る島もありといへば、鼠ばかり生ずる島もまことにや、

〔催馬樂〕老鼠

にしでらの、おいねずみわかねずみ、おんもつんづけさつんづけさつんづ、ほうしにまうさんし、にまうせ、ほうしにまうさんし、にまうせ、

〔夫木和歌抄二十七鼠〕百首御歌　土御門院御製

ふゆがれの草葉にさわぐ日のねずみ昨日は今日になるぞ程なき

世をしのぶ心のうちのあなねづみやすくいづべき道もあるらん

〔柳亭記下〕白鼠

白鼠は福の神といふ程の事にて、主人によくつかふる手代を、あの内の白鼠ぢやなどは、今もいふ事にて、めづらしからねど、ふるくもありしといふ證を、たゞ二ッ三ッ錄す、

廣小路延寶六年　酒藏の白鼠なり上野の花　撰者不卜

花咲ゆゑに、酒賣ルをいふ、上野の花は酒屋の福の神といふ意なり、○中略

又同書一吉原三茶三福對、延寶九年板、に福鼠といふ事、ところ〳〵にあり、白鼠といふと同意、○中略

内鼠

内鼠は家にのみ籠り居て、世間知らずの人をいふ、此詞は白鼠より古く見えたり、他我身の上明暦三年刻、山岡元隣著、三の卷、たのしき庄屋殿一番子を一人まうけられ、朝夕是をかしづかれけるにて、うちかぶりの程も過ぎ、はや十六七にもなりにける、されども此太郎、内鼠にてありしかば、庄屋殿是をなげき、ある人に我〻一人の子を持たりといへども、此内鼠にて、我内より外を知らず、さればい